

七

七



〜、随筆に随筆

松 郷

旧先の
ことばも

小
杉 松 葉

昭和三十三年三月十日印刷
昭和三十三年三月十五日發行

定價五百八十円

著者 小杉放庵

刊行者 澤田伊四郎
東京都千代田区九段四ノ三

發行所 龍星閣

東京都千代田区九段四ノ一三
銀座口座東京三三六
電話九段五九二七二

製版・大森写真製版所 印刷・浩文社 製本・横田製本株式会社

序

誰にも故郷はある、誰も故郷を思う、私のこれまで作つた歌の中から拾って見る、故郷日光についての歌ずいぶんの數になります、私も亦相當の故郷思いであつた、これらの歌に幾篇の隨筆を加えて、一部の小冊子にまとめて見ました、老いていよいよ故郷を思う心を、故郷の人に讀んでもらいたく、又他の故郷を思う人びとに讀んでもらいたく。

繪三十葉、多く思い出のままにかいて見ました、近頃のスケッチもあります。

赤倉の山居にて

放 庵

三十一年秋

目次

序

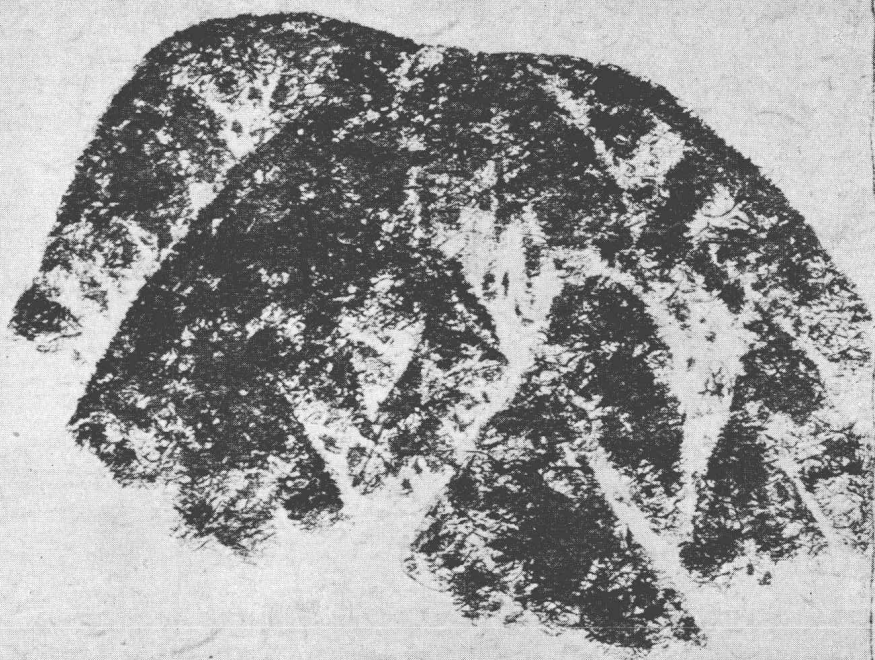
繪

くろのかみ山	馬屋の三猿	深沙大王	おどろの野村獅子舞	尾瀬の川治の湯	昔の川治の湯	けんのちん煮る	鳥屋場のあら社みこ	粕尾村の切山	大谷村より黒髪山	七里伏のたき	けごんのたき	絹の沼女仙	龍の尾社	神變大菩薩	老杉	石楠花	天狗	五重塔	五郎平	蚊供養山	石おむし山里
第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一	第一
二〇	一七	八	七	六	五	四	三	二	一	〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	〇	九
圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖

1 くろかみ山

〔日光山讃歌〕一頁参照

この山の祭神八千矛^{やちほこ}の大國主^{おほくにぬし}のみこと、山裾^{やまもと}の風穴^{ふうけつ}より春秋二度大風出でたる爲、二荒山の名あり、一説、佛經ふだらく山の言の轉じたるものとも、日本の名山、日光山水の主人公。



山



2 馬屋の三猿

〔日光讃歌〕二頁参照〕

馬屋の猿神庫の象もねむげなり春の日
ながのうつらうつらに

古中國にても馬と猿とは縁深き傳説あり、見ざる聞かざる言はざるは、古日本人の消極的處世法、東照宮の彫刻に眠り猫のみ有名なれど、神庫のレリーフの象と、この厩の三猿とは殊におもしろくできて居る。

馬屋の三猿

見ざる言わざるいはざる



3 深沙大王

〔日光讀歌〕三頁參照

深沙大王は佛教の護法神、大谷川の急流に大蛇を投げ下して橋に渡してくれたが、開山の勝道上人さすがに渡りかねたところ、山民山菅を刈つて蛇の上に布いた。それで山菅の蛇橋の名残り、山民は橋かけの長平と呼ばれて其家も後世までつゞく。

深沙大王



4 ところ野村獅子舞

〔日光讃歌〕五頁参照〕

大字所野の獅子舞は、昔高原山に猛き妖賊籠りたるを、この獅子舞にて妖法を破ると傳えてあり、獅子頭は獅子よりは龍頭を思わしめる、制作古風にて珍らし。

ところ野村獅子舞



5 おどれ子どもら

〔故郷長歌〕一一頁参照

夏の日 of 長きがまゝに古太鼓とどろに

鳴らす踊れ子供ら

あの頃の故郷は、われも人もものどかなりしと今は思う、日本全國がせわしくなつたので。

おどろきおどろき



6 尾瀬原

「尾瀬の山水」一三頁参照

上つ毛や尾瀬の草原草がくりわが行き
行くにはての知らなく

電力の工事の爲、この珍重すべき尾瀬の濕原を昔の沼にかえず企
圖ありて、山水の人は悲しむ、自然力は宏大、やがてまた再び元の
濕原にかえらずとは云いがたい。